

# 学生発案型授業

横浜国立大学大学教育総合センター・FD推進部

安野 舞子

横浜国立大学では、学生が授業の企画・運営を通じて自ら学ぼうとする意欲を増すこと、授業者が受講生である学生と双方向にコミュニケーションを図り、より実践的な授業を展開することを目的として、「学生発案型授業」を平成26年度より開始した。本学は、この新しいスタイルの授業形式の導入により、学生の自立的な学びの機会創出につながることを期待している。本稿では、同授業を開始した経緯、ねらい等について紹介する。

## 1 教育改善の先に

FD (Faculty Development) 推進部は、教育改善を行う部署である。教育改善、殊に「授業改善」に関して言えば、単に教員の授業テクニックの向上といった一方的なものではなく、学生自身が主体的・能動的に自己の学習態度を向上させる双方向のものであることが重要となる。

一般的に「学生発案型授業」といえば、学生たちはさまざまな授業の提案をするが、学生たちが動くのは自らの提案に見合う教員探しまでで、それ以降はほとんど教員任せということが多々ある。

これに対し、FD推進部では、提案の先も全て学生に関わってもらおうこと、つまり(担当教員はつくが)授業の企画から運営まで全て学生に経験させることで、自ら学ぼうとする意欲を向上させたいと考えた。

これを実現したのが、本学での「学生発案型授業」である。

## 2 課題解決力を授業テーマに

授業のテーマは社会人基礎力、とりわけ課題解決力とした。その授業内容は、企業や地域(自治

体)の課題にグループで取り組み、課題解決の提案を取りまとめ、発表するものである。



企業への最終プレゼンテーションの様子

なぜ課題解決力なのか。一般的に高校までの学びは、教科書の内容を暗記して基礎を作るという、予め正解が用意されている学びである。しかし、大学以降の世界は正解が一つではない。自ら課題を見つけ解決する力が必要であり、その基礎を大学で身に付けておかなければならない。その実践の場としてこの授業を活用しようと、課題解決力をテーマに据えた。

## 3 運営する学生の意欲が鍵

「もっと意欲のある学生とグループワークをしたかった。」これは、春学期に学生発案型授業の

グループワークに参加した学生の声のひとつである。

受講生は、エントリーシートを参考に選抜するが、どんなに熱心な学生でも、実際の授業やグループワークの中でやる気が低下してしまうことがある。受講生の関心を継続させる鍵の一つは、運営を担う学生の意欲を引き出し、それを伝播させることである。



運営スタッフの学生による講義

#### 4 運営を担う学生の意欲を引き出すために

運営スタッフの学生の意欲を引き出すための方法の一つは、一定の成果を出させることである。一度成果の味をしめれば、それが次の取組みへの意欲につながる。そのためには、教員がいかに学生の心に火を付け、うまくサポートして成功に導くかが重要である。

もう一つは、学生本人が気づいて自ら動けるような良い問いかけを教員がすることである。はじめから答えを提示するのではなく、本人の気づきにつなげ答えに導けるような問いかけが必要である。仮に問いかけをしても教員が意図していた方

向の答えが返ってこなければ、問いかけを繰り返すしかない。教員は、大学が多くの学生にとっては社会に出る前の最後の学びの場である、ということ強く意識し、あきらめないことが重要である。

#### 5 今後の展望

「学生が授業を担当することはとても斬新でよい。」これは、春学期の受講生の意見である。

教員がやってしまっただけでは学生の心に響かないことでも、学生同士であれば響くことがある。この可能性をさらに確かなものにしていき、本授業で取り扱う課題解決力の更なる向上につなげていきたい。

そのために、今後は運営する学生の育成にもっと力を注ぎたい。運営スタッフに手を上げる学生の多くは、先輩たちの姿を見て自分もやりたいと思うものである。そうした人たちを増やしていくためにも、まずはFD推進部が意欲のある学生を見つけ出し、引き込むことが必要である。その意欲ある運営スタッフの姿を見て、自分もできそうだと、やってみようとする他の学生にも思わせることが重要である。そのサイクルを確立できれば、より学びに意欲のある学生を増やしていけるのではないかと考えている。

学生と教員とが一緒になり、本来の授業改善の目的とするところを、この学生発案型授業を通じて目指していきたい。